









調査速報 モニタリングサイト1000干潟調査



更新履歴

-  2014年7月4日 汐川干潟サイトの調査結果を掲載
-  2014年8月7日 盤洲干潟サイトの調査結果を掲載
-  2014年8月7日 永浦干潟サイトの調査結果を掲載
-  2014年10月1日 松川浦サイトの調査結果を掲載
-  2014年10月1日 石垣川平湾サイトの調査結果を掲載
-  2014年11月7日 厚岸サイトの調査結果を掲載
-  2015年3月4日 中津干潟サイトの調査結果を掲載
-  2015年3月5日 南紀田辺サイトの調査結果を掲載

はじめに

我が国の沿岸域は、磯、干潟、アマモ場、藻場及びサンゴ礁に代表される生物多様性の高い貴重な生態系を有しています。

私たちは、これらの生態系から魚介類や海藻などの食料を得るとともに、潮干狩りや観察会などの余暇や教育活動の場としても利用しています。また、これら沿岸域生態系の機能(水質の浄化、台風等による高波を防ぐ作用、二酸化炭素を吸収する働きなど)は、私たちの生活に様々な恩恵をもたらしてくれます。



ルリマダラシオマネキ

干潟調査サイト位置図



※調査サイト名をクリックすると公開中の各速報にリンクします。

干潟とは?

「干潟」とは、砂泥質の遠浅な海岸であり、内湾や河口域などの波の穏やかな潮間帯に形成される場所です。また、干潟は潮の満ち引きがあるため、干出時には鳥類(シギ・チドリなど)のえさ場として、冠水時には稚仔魚の生育場として多くの生物に利用されており、生物多様性が極めて高い生態系であると言えます。

干潟調査

モニタリングサイト1000干潟調査では、平成20年度から「毎年調査」と「5年毎調査」の2つの調査により、各サイトの複数のエリアで底生生物(貝類やカニ類など)の生物相を調べることで干潟の長期変化をとらえ、生態系保全対策のための基礎情報を得ています。

平成26年度は、日本沿岸の8箇所のサイトで「毎年調査」を実施し、干潟表面や砂泥中を生息場所とする生物の種類や数の変動を調べます。

参考情報

- ・平成25(2013)年度モニタリングサイト1000沿岸域(干潟)速報
- ・平成25(2013)年度モニタリングサイト1000沿岸域(磯・干潟・アマモ場・藻場)調査報告書
- ・モニタリングサイト1000沿岸域調査 磯・干潟・アマモ場・藻場 2008-2012年度とりまとめ報告書



環境省 自然環境局

生物多様性センター
Biodiversity Center of Japan



Wetlands
INTERNATIONAL

厚岸サイト (北海道厚岸郡厚岸町)

A エリア (厚岸湾)



厚岸湾の北奥部に位置する幅の狭い砂質の前浜干潟である。潮上帯はコンクリートで護岸されている。

B エリア (厚岸湖)



厚岸湖の東側最奥部に位置する河口干潟である。陸路からアクセスすることが困難な場所にあるため、調査地へはボートを使用して向かう。

【調査日】2014年7月13, 15日

【サイト代表者】仲岡雅裕 (北海道大学北方生物圏フィールド科学センター)

【調査者・調査協力者】仲岡雅裕・伊佐田智規・桂川英穂・頼末武史・Venus Leopardas・楠崎真央・伊藤美菜子・須貝洋海・寺西琢矢・橋本真里菜 (北海道大学)

【写真撮影】仲岡雅裕

A エリア

厚岸湾の北奥部、厚岸湖の出入口に近いところに位置する砂質の前浜干潟です。2011年までは潮上帯にわずかに海岸植生がみられましたが、護岸の拡張工事に伴い、2012年度以降は植生が消失しています。一方、潮間帯下部から潮下帯はアマモ場が広がり、アマモ (*Zostera marina*) の生育が確認できます。

今年度調査も、干潟表面に生育する海藻類を含め、確認できる生物は少なく、潮間帯下部にアマモとその実生 (みしょう: 海草の種) がわずかに生育していただけでした。埋生生物では、例年と同様に、アサリ、オオノガイ、ウバガイ、エゾイシカゲガイ (写真1) などの二枚貝類、チロリ科やミズヒキゴカイ科などの多毛類、アナジャコ類 (写真2) などが観察されました。

潮間帯上部の干潟の面積がやや縮小しており、潮上帯の護岸工事の影響が懸念されます。今後の地形変化を注意深く監視していく必要があります。



写真1: エゾイシカゲガイ (蝦夷石蔭貝) 「イシガキガイ (石垣貝)」として食用で流通している。北海道から鹿島灘まで生息するが、北海道と宮城県が主な産地である。



写真2: アナジャコ科の一種



写真3: コアマモ
B エリアの潮間帯中部から下部にかけて生育する。



写真4: B エリア陸側の景観
シバナやアッケシソウなどが生育する塩性湿地が広がる。

B エリア

厚岸湖の東側最奥部のトキタイ川の河口部に広がる泥質の河口干潟です。潮間帯中部から下部にかけてはコアマモが生育しています (写真3)。一方、干潟の陸側は一段高いピート (泥炭) 台地となり、塩性湿地が広がっています (写真4)。

今年度調査は、干潟の表面に生息する生物は例年通りホソウミニナが多いものの、数多くのホソウミニナが確認できた場所は例年より潮間帯上部の方向に移動している模様でした。埋生生物では、例年通り、オオノガイ、サビシラトリ、アサリ等の二枚貝が多く出現しました。また、干潟の陸側の植生帯では、アッケシソウやアッケシカワザンショウ等の塩性湿地特有の希少な動植物が今年度調査でも確認されました (写真5)。

調査中には干潟を歩くキタキツネの姿を目撃することができました (写真6)。



写真5: 厚岸サイトの希少な生物
B エリアの塩性湿地では、アッケシソウ (絶滅危惧Ⅱ類) やアッケシカワザンショウ (準絶滅危惧) の希少な生物を今年度も確認することができた。



写真6: 干潟を歩くキタキツネ



松川浦サイト (福島県相馬市)

A エリア (鵜の尾)



松川浦県立自然公園に位置する潟湖干潟である。調査地点は外洋との通水路付近に位置し、未だ震災の爪痕が残っている。

【調査日】2014年6月11, 12日

【サイト代表者】鈴木孝男 (東北大学大学院生命科学研究科)

【調査者・調査協力者】鈴木孝男・佐藤慎一・山中崇希 (東北大学)、金谷 弦 (国立環境研究所)

【写真撮影】鈴木孝男

B エリア (磯部)



松川浦の最奥部に位置する潟湖干潟である。沖側から岸方向を望む。岸辺は堤防の建設工事が進行中である。



写真2：Aエリア潮間帯下部
震災により消失していたアマモ場 (赤線部分) が少しずつ回復している。



写真3：マツカウウラカワザンショウ
環境省第4次レッドリストにおいて絶滅危惧種Ⅱ類の希少種であるが、Aエリアでは高密度で生息していた。



写真4：ホソウミニナ
震災後激減したが、AL地点の近くに比較的高密度で生息していることが確認され、徐々に分布域を広げてきている。



写真1：マテガイ
松川浦では震災前にはほとんど記録がなかったが、今年度調査では全域で確認された。



写真5：ツバサゴカイの棲管 (矢印)
ツバサゴカイがすんでいる管。本種の生息が確認されている本州の干潟は限られており、希少な種となっている。

A エリア

A エリア(鵜の尾)は、外洋との通水路に近い位置にあり、底質が砂質の入江状になった干潟です。震災により壊滅的な被害を受けたアマモ場は昨年度頃から回復傾向にあり、潮下帯には比較的多く見られるようになりました(写真2)。

本年度の調査では、環境省第4次レッドリストにおいて絶滅危惧Ⅱ類として掲載されている巻貝のマツカウウラカワザンショウ(写真3)は目に見えて増加し、いずれの調査ポイントでも500個体/m²以上でした。また、震災前には高密度で生息していた巻貝のホソウミニナ(写真4)は、昨年度に続き少数しか見られませんでした。Aエリアの近辺に多数生息している場所があり、徐々に分布を広げているようでした。二枚貝ではイソシジミとアサリが多く出現しましたが、特にアサリは小型個体も多く、着実に個体数を回復してきているようです。

多毛類では、ミズヒキゴカイが優占し、昨年度同様に多くのツバサゴカイの棲管(写真5)を確認することができ、甲殻類では、タカノケフサイソガニがよく見られました。

B エリア

B エリア(磯部)は松川浦の最奥部に位置し、底質は砂質から砂泥質です。ところどころに泥分が多い場所がみられ、昨年度よりも還元的(土中へ酸素がいきわたっていない状態)になっています。調査地点が潟湖の最奥部であることから海水交換が不十分なためと考えられます。

本年度の調査では、多毛類ではイトゴカイ類(写真6)とドロオニスピオが優占し、甲殻類ではカニ類はあまり見られず、優占していたのはイサザアミ類とニッポンドロソコエビでした。また、ムロミスナウミナナフシも比較的多く出現しました。



写真6：イトゴカイ類 (矢印)
Bエリアに出現した多毛類では、本種がたくさん確認された。



盤洲干潟サイト (千葉県木更津市)

Bエリア

小櫃川河口の右岸に形成された扇状地を走るクリーク(滞筋)の最上部周辺の後背湿地内部(BU)と、クリークが本流に合流する本流際(BL)に調査ポイントを設置しました(写真4)。両ポイントとも周囲には広範囲にヨシ原が形成されています。

定量調査において、両ポイントともに表在生物は全体的に少なく、ホソウミニナ(写真2)やチゴガニ等数種のみでしたが、BLの特定地点でヤマトシジミが多数出現しました(写真5)。埋在生物はソトオリガイ、多毛類(カワゴカイ属やホソイトゴカイ属の一種)、ムロミスナウミナナフシが両ポイントで共通して出現し、BUではコケゴカイやニホンスナモグリ等が、BLではヤマトスピオやドロオニスピオ近似種等の多毛類が出現しました。

定性調査において、エリア全域でアシハラガニが多数見られました。BUの植生帯ではヒメハマトビムシやキタフナムシ等が出現し、複数種のカワザンショウ類やクシテガニ(写真6)等のヨシ原に依存する動物が見られましたが、昨年度まで見られていたキントイロカワザンショウやカハタレカワザンショウ等の巻貝は出現しませんでした。また、干潟表面ではチゴガニやヤマトオサガニ等の軟泥質を好むカニ類が多く見られ、転石帯ではオイワケゴカイ、カクベンケイガニ、イソガニ、ケフサイソガニ等が見られました。一方、潮間帯下部では昨年度多産したヤミヨキセワタ(写真3)が全く見られませんでした。

写真6：クシテガニ

ヨシ原に生息する種で、東京湾が分布の北限にあたる。



写真4：小櫃川本流際の調査ポイント(BL)

写真奥に東京湾が広がる。



写真5：ヤマトシジミ

定量調査において、特定地点から多数出現した。

写真1：約1km沖合の調査ポイント(AL)

潮が引くと干潟表面には波によって作られた模様がみられる。



写真3：ヤミヨキセワタ

Aエリアでは、昨年度に比べ分布がより沖側に集中していた。本種はこれまで学名がついていなかったが、今年、盤洲干潟をタイプ産地として学名(*Melanochlamys fukudai*)がつけられた。



写真2：ホソウミニナ
両エリアで確認された。

Aエリア (前浜干潟)



東京湾東岸に位置する小櫃川河口付近に形成された前浜干潟である。底質は砂質で、砂質干潟としては日本で最大級の面積を誇る。

Bエリア (後背湿地内部)



小櫃川河口右岸の三角洲に形成された後背湿地である。底質は潮間帯上部が泥質、下部は砂質になる。潮間帯上部にはアイアシなどのヨシ原が形成されている。

【調査日】2014年5月28, 29, 30日

【サイト代表者】多留聖典(東邦大学理学部東京湾生態系研究センター)

【調査者・調査協力者】多留聖典(東邦大学)、海上智央(株式会社CES)、金谷 弦(国立環境研究所)、尾島智仁(東京湾水中科学協会)、青木美鈴(WIU)

【写真撮影】多留聖典

Aエリア

小櫃川河口の右岸から西向きの沖に広がる前浜干潟です。潮上帯にはヨシ原が形成され、その直下には疎らな転石場があり、その先は砂質の干潟が続いています。ヨシ原や転石帯が近接する潮間帯上部(AU)と、約1km沖合の潮間帯下部(AL)に調査ポイントを設置しました(写真1)。本年度のAUには、浅く洗掘されたようなタイドプールが生じていました。ALは、近傍に小規模なアマモとコアマモの群落が散在していました。

定量調査において、AUでは表在生物・埋在生物ともにホソウミニナ(写真2)、ウメノハナガイモドキ、ソトオリガイ、コケゴカイ等が出現しました。また、ALでは昨年度同様にイボキサゴやツツオオフエリアが多く出現しました。

定性調査において、AUでは昨年度調査で多数確認されたヤミヨキセワタ(写真3)の分布がより沖側に集中していました。ALではエノシマイソメやミサキギボシムシなどの大型種も出現しました。また、2012年度調査においてALで確認された「*Pinnixa* 属の一種」は、2014年に盤洲干潟をタイプ産地として新種記載され、「バンズマメガニ *Pinnixa banzu*」と命名されました。本年度調査では、共生する宿主のツバサゴカイが発見されなかったため、残念ながらバンズマメガニは確認されませんでした。



汐川干潟サイト (愛知県豊橋市)

Bエリア (杉山)



汐川の河口から田原湾に広がる広大な干潟の中央部に位置する河口干潟である。底質は砂泥質である。

Cエリア (紙田川河口)



田原湾に流れ込む紙田川の河口部に位置する河口干潟である。底質は砂泥質及び礫がみられる。潮上帯にはヨシなどが生育する塩性湿地がある。

【調査日】2014年4月17日

【サイト代表者】木村妙子 (三重大学大学院生物資源学研究科)

【調査者・調査協力者】木村妙子・木村昭一・田中綾子・日向智大 (三重大学)、藤岡エリ子 (汐川干潟を守る会)

【写真撮影】木村妙子

Bエリア

汐川の河口から田原湾に広がる広大な干潟の中央部に位置し、底質は砂泥質です。底土表面にはアオサの堆積は確認されませんでした。エイの捕食痕と思われるくぼみが確認できました。

今年度調査では、底土表面には全体的にウミナ(巻貝)が生息し、潮間帯上部から中部にはヘナタリ(巻貝)が高密度に生息していました(写真1)。また、潮間帯上部から下部にかけて、少数ですが絶滅危惧Ⅱ類のイボウミナ(巻貝)が見つかりました。

潮間帯中部では、マガキ集団の間隙にタマキビやカキウラクチキレモドキ(巻貝)、ウネナシマヤガイ(二枚貝)などが生息していました。また、底土中には全体的にオキシジミやユウシオガイ(二枚貝)、ゴカイ類が生息していました。潮間帯下部では、底土表面で大型のアナジャコ(写真2)が観察されました。また、ムギワラムシ(写真2)やツバサゴカイが生息し、それらと共生するカニダマシ類も観察できました。一方、今年度調査ではタマシキゴカイの糞塊が確認できませんでした。

(Bエリア潮間帯下部)



写真2: アナジャコ(上)とムギワラムシ(下)

ムギワラムシは、本調査の開始以降初めて確認された。矢印先が頭部に当たる。

(Bエリア潮間帯上部)



写真1: 左から、ヘナタリ、イボウミナ(絶滅危惧Ⅱ類)、ホソウミナ、ウミナ

Cエリア

田原湾部に流れ込む紙田川の河口干潟で、底質は全体的にBエリアより泥質です。また、潮間帯上部の底土には礫が多く含まれます。2008年度の調査開始以来、干潟面積が広がっています。

潮間帯上部から下の底土表面にはウミナ、ホソウミナ、ヘナタリ(巻貝)が生息しており、特に潮間帯上部では高密度で確認されました。潮間帯下部ではBエリア同様に、絶滅危惧Ⅱ類のイボウミナが少数見つかりました。底土中には全体的にミズヒキゴカイ類(写真3)やオキシジミ(二枚貝)などが多数生息していました。塩性湿地内にもウミナが多数生息し、コメツキガニ(写真4)やチゴガニも観察できました。

2011年に調査地の近隣河口域で発見された外来種ヒガタアシ(スパルティナ・アルテルニフロラ<イネ科植物>)は、今年度調査では調査地内には生育が確認されませんでした。

本種は2014年6月11日に新たに特定外来生物に指定された「スパルティナ属の全種」に含まれ、非常に強い繁殖力により在来種を駆逐したり、干潟を草地化してしまうなど生態系への影響が懸念される種類です。自治体等による継続的な駆除活動により減少していますが、引き続き干潟への侵入に対して警戒が必要です。

また、汐川干潟周囲では護岸の改修が進みつつあり、生態系への影響について今後注意深く監視する必要があります。

(Cエリア潮間帯下部)



写真3: ミズヒキゴカイ

(Cエリア塩性湿地)

写真4: コメツキガニ



南紀田辺サイト (和歌山県田辺市)

Aエリア (内之浦)



田辺湾の湾中央に位置し、水路のみで外海とつながる潟湖干潟である。底質は軟泥で少し掘ると還元層が見られる。

【調査日】2014年6月13,14日

【サイト代表者】古賀庸憲 (和歌山大学教育学部)

【調査者・調査協力者】古賀庸憲 (和歌山大学)、香田 唯 (兵庫県在住)、大畠 麻里 (きしわだ自然資料館)、安岡法子 (奈良女子大学)

【写真撮影】古賀庸憲

Bエリア (鳥の巣)



田辺湾の湾中央にある小さな入り江の先端近くに位置する前浜干潟である。潮間帯下部には、コアマモの生育が確認できる。

Aエリア

Aエリアは、湾中央に位置し、水路のみで外海とつながる潟湖干潟です。潮間帯上部の岸寄りの場所はやや固く長靴でも歩くことができますが、滞筋(みおすじ)に近い場所はぬかるむため歩くことができません。

今年度調査でも潮間帯上部、下部ともに豊かで多様な生物相が形成されていることを確認できました。

潮間帯上部ではホソウミニナが優占種ですが、ミヤコドリ、ハザクラ等の希少な貝類も継続して確認されています。また、甲殻類が特に多様で、個体数も多く確認されました。希少種であるウモレベンケイガニ(写真1)に至っては6年連続で確認することができました。

潮間帯下部では、巻貝類、二枚貝類、甲殻類、多毛類の出現数が多く、特に巻貝のコゲツノブエが多数確認されました(写真2)。また、生態に関する情報が少ない微小貝のヒガタヨコイトカケギリ等の希少種も継続して確認されました。



写真1: ウモレベンケイガニ

Aエリアで調査開始以降6年連続して確認されている。干潟の絶滅危惧動物図鑑において、絶滅危惧IB類に指定されている。

写真2: コゲツノブエ (絶滅危惧II類: 環境省第4次レッドリスト)
南紀田辺サイトではA、B両エリアの潮間帯下部で優占する。

Bエリア

Bエリアは、湾中央でも小さな入り江の先端近くに位置する前浜干潟です。潮間帯上部は砂質干潟に出現する生物が多く、大きな岩には磯に生息する生物も見られる点が特徴です。潮下帯にアマモやコアマモが群生し、コアマモの一部は潮間帯下部まで広がっています。

今年度調査でも潮間帯上部、下部ともに豊かで多様な生物相が形成されていることを確認できました。

潮間帯上部では本調査開始以降初めてトリウミアカイソモドキが確認されました(写真3)。また、昨年度調査に続き、希少種であるウミニナを確認することができました。他には、クログチ(二枚貝類)やコメツキガニなどが多数観察されました。

潮間帯下部では、例年同様コゲツノブエが優占しており、テナガツノヤドカリやチゴイワガニ等の希少種も継続して確認されました。特に希少種のスジホシムシ類(写真4)は時々確認されていますが、スジホシムシヤドリガイは4年ぶりに確認することができました。また、ムシロガイ、ハボウキ、スタレハマグリ等の希少な貝類も継続して確認されました。

ただ、両エリア共に、昨年度同様中型サイズ以上の二枚貝類の個体数が少なく、田辺湾内に侵入したナルトビエイによる捕食の影響が懸念されました。



写真3: Bエリアにおいて記録された希少な生き物

本調査開始以降初めて記録されたトリウミアカイソモドキ(左)と昨年度調査に続き確認された準絶滅危惧種(環境省第4次レッドリスト)のウミニナ(右)。トリウミアカイソモドキは、干潟の絶滅危惧動物図鑑において、準絶滅危惧に指定されている。



写真4: スジホシムシ科の一種

写真のスジホシムシ類の体表に付着する希少種のスジホシムシヤドリガイ(殻長2~4mm程度)が4年ぶりに確認された。



中津干潟サイト (大分県中津市)

Aエリア (中津川河口)



Bエリア (東浜)



Cエリア (大新田)



中津干潟サイトは、瀬戸内海の周防灘に面する中津市の沿岸に広がる干潟です。毎年、中津川河口の干潟 (Aエリア)、前浜干潟である東浜 (Bエリア) と大新田 (Cエリア) の3箇所を調査をおこなっています。

【調査日】2014年6月13, 14, 15日

【サイト代表者】浜口昌巳 (水産総合研究センター 瀬戸内海区水産研究所)

【調査者・調査協力者】浜口昌巳・梶原直人 (水産総合研究センター 瀬戸内海区水産研究所)、
西 栄二郎・松尾香菜子・大谷健二 (横浜国立大学)

【写真撮影】梶原直人、浜口昌巳

Aエリア

Aエリアは、中津川の河口部に位置する調査エリアです。河口部に最も近い調査地点の底質は泥で、河口からやや上流(龍王橋付近)の調査地点の底質は砂です。潮上帯には、広大なヨシ原やハマサジ及びフクドが生育する植生帯がみられます。

近年、Aエリアは大雨による山国川の度重なる出水の影響や出水後の河川周辺の復旧工事に伴う重機等による作業により、その周辺環境は大きく変化しています。特に、塩性湿地や河口域に生息する希少な生物であるシカメガキ、ハクセンシオマネキ、シオマネキ、ウモレベンケイガニ等の生息場所も大きな変化がみられます。

今年度の調査では、大雨による出水で影響を受けたハクセンシオマネキの生息場所が出水前の状態に戻りつつあり、ハクセンシオマネキの個体数も増加していることが確認できました。一方で、シオマネキの生息場所ではアシハラガニの増加が確認でき、今後、シオマネキの生息への影響が懸念されます。また、今年度の調査ではカブトガニの幼生が観察されました。



調査風景

25cm×25cmの方形枠を干潟表面にランダムに設置し、枠内に出現した底生生物の種類と個体数を調査している。

Bエリア

Bエリアは、中津干潟中央部に位置する調査エリアで、潮間帯上部の調査地点の底質は砂泥、潮間帯下部の調査地点の底質は砂です。広大な砂質干潟の沖合にはコアママが点在しています。

隣接するCエリアでもコアママが生育する面積が拡大していますが、今年度の調査では、Bエリアでもコアママが急激に増加している様子を確認することができました。

今年度の調査では、本調査開始以降初めてアミメキンセンガニとクイチガイサルボウが確認されました(写真1)。また、しばしば大発生が認められる微小巻貝のオオシンデンカワザンショウは、昨年度と同様、確認されませんでした。



写真1：アミメキンセンガニ (左) とクイチガイサルボウ (右)

Bエリアの潮間帯下部で本調査開始以降初めて確認された。

Cエリア

Cエリアは、中津新港に隣接する調査エリアで、潮間帯上部の調査地点の底質は泥、潮間帯下部の調査地点の底質は砂です。潮間帯中部から潮間帯下部にかけてコアママが繁茂しています。コアママは、本調査開始以降、毎年、密度・面積ともに増加しており、今後、底生生物の生息への影響が懸念されます。また、度重なる集中豪雨により陸域から運ばれたと思われるごみや流木の堆積が調査エリアで確認できました。

今年度の調査では、ウミニナやイボウミニナに付着しているカキが高頻度で観察され、遺伝子解析によりシカメガキであることが確認できました(写真2)。



写真2：ウミニナに付着したシカメガキ (赤丸) 付着している個体が高頻度で確認された。

永浦干潟サイト (熊本県上天草市)

A エリア (永浦干潟)



有明海と八代海を結ぶ瀬戸(幅の狭い海峡)に位置する永浦島南西部の前浜干潟である。底質は砂泥質であり、「日本最大のハクセンシオマネキ生息地」として有名。

B エリア (ビジターセンター)



永浦島南東部に位置する前浜干潟である。底質は砂泥質、干潟上縁は自然海岸でナガミノオシバなどの塩生植物が生育する。また、潮下帯にはアマモ場がみられる。

【調査日】2014年4月29, 30日

【サイト代表者】逸見泰久(熊本大学沿岸域環境科学教育研究センター)

【調査者・調査協力者】逸見泰久・嶋永元裕・田中源吾・片岡椋子・岳野春菜・林悠真(熊本大学)、逸見高志(熊本市)

【写真撮影】逸見泰久

A エリア

永浦島の南西部にある干潟で、潮上帯は堤防です。底質は、潮間帯上部は砂泥質、潮間帯下部は泥質です。樋門を通して海水の流入する調整池には小規模なヨシ原が、潮間帯下部には小規模なアマモ場が見られます。

定量調査の表在生物では、潮間帯上部でホソウミナ、ウミナ、ハクセンシオマネキが、潮間帯下部でホソウミナ、テナガツノヤドカリ、ユビナガホンヤドカリが多く見られました。埋在生物では、潮間帯上部でハクセンシオマネキが、潮間帯下部でアサリが多く見られました。なお、昨年度に続き、ホトギスガイが多数確認されました(写真1)。

定性調査では、潮間帯上部でツボミガイ、ヘナタリ、シオヤガイ、コメツキガニ等が、潮間帯下部でムラサキハナギンチャク、テングニシ(写真2)、ハボウキガイ、ツバサゴカイ、ヒメヤマトオサガニ等が確認されました。また、塩性湿地では、ハマガニやカクベンケイガニ、希少種であるシマヘナタリが確認されました(写真3)。一方で2008年度以降継続して出現していたカワザンショウの一種(巻貝)は、昨年度から確認することができていません。以前に比べ樋門が常時閉ざされていることが多いため、調整池の塩分低下などが原因で個体数が激減もしくは絶滅した可能性もあり、今後、その生息を注意深く確認していく必要があります。



写真3：シマヘナタリ

環境省第4次レッドリストでは絶滅危惧I類(絶滅の危機に瀕している種)として扱われている希少種である。

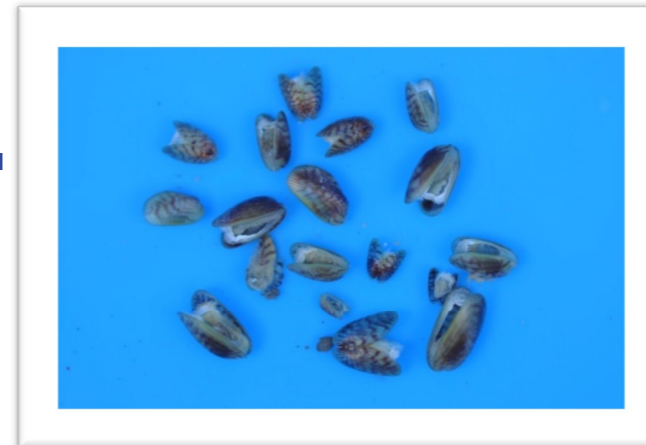


写真1：ホトギスガイ

昨年度に続き、AとBエリアで多数確認された。



写真2：テングニシ(巻貝)と卵塊
テングニシの卵塊(矢印)は通称「海ほおずき」と呼ばれている。

B エリア

永浦島の南東部にある干潟で、潮上帯は自然海岸です。底質は全体的に砂泥質で、転石や岩礁も見られます。潮間帯上部にはナガミノオシバやハマツツナ等の塩生植物が、潮間帯下部にはアマモ場が見られます。

定量調査の表在生物では、潮間帯全域でホトギスガイが、潮間帯上部でホソウミナが、潮間帯下部でアラムシロガイやテナガツノヤドカリが多く見られました。埋在生物では、潮間帯全域でホトギスガイが、潮間帯上部でユウシオガイやテナガツノヤドカリが、潮間帯下部でホシムシの一種が多く見られたほか、マキガイソギンチャク、イボウミナ、ミドリシャミセンガイ、メナシピンノも確認されました。今年度の定量調査の特徴としては、ホトギスガイ(写真1)が昨年度に続いて多数確認されたことと、ホシムシの一種(写真4)が多かったことが挙げられます。

定性調査では、潮間帯上部でコメツキガニやクロベンケイガニ等が、潮間帯下部でカニモリガイやハボウキガイの貝類、ミナミエラコ(写真5)やツバサゴカイ等の多毛類のほか、イトマキヒトデ、アカエイ等も確認されました。塩性湿地では、ヘナタリ、フタバカクガニ、ハマガニ等が確認されました。



写真4：ホシムシの一種
今年度調査で多数確認された。



写真5：ミナミエラコ

環形動物の仲間で、ゴカイやケヤリムシなどの多毛類の一種である。

石垣川平湾サイト (沖縄県石垣市)

Aエリア (湾口部)



国の名勝に指定されている川平湾湾口部の近くに位置する干潟である。今年度は調査中に突然のスコール(豪雨)に見舞われた。

Bエリア (湾奥部)



川平湾の湾奥部に位置する干潟である。潮間帯上部の干潟表面にはリュウキュウコメツキガニやミナミコメツキガニが作った砂団子が一面に観察される。

【調査日】2014年7月26, 27日

【サイト代表者】岸本和雄(沖縄県農林水産部水産課)

【調査者・調査協力者】岸本和雄(沖縄県農林水産部水産課)、久保弘文(沖縄県水産海洋技術センター)、狩俣洋文(沖縄県栽培漁業センター)、藤田喜久(琉球大学教育センター, NPO 法人海の自然史研究所)

【写真撮影】岸本和雄

Aエリア

国の名勝に指定されている川平湾の湾口近くに位置する干潟で、後背地に小規模なマングローブと石灰岩の岩礁海岸がみられます。調査エリアの底質は砂質で、潮間帯上部にはほとんど植生がみられず、潮間帯下部付近に小規模なアマモ場が点在します。

今年度の定量調査でも、例年通り、干潟表面にはリュウキュウコメツキガニが、砂中からはウメノハナガイ(写真1)が多く確認されました。後背地での定性調査では、飛沫帯の石灰岩の間隙から、ニワタズミハマシイノミガイ(写真2)やエレガントカドカド(いずれも環境省第4次レッドリスト:絶滅危惧Ⅱ類)などの海浜性の希少な巻貝類が複数種観察され、本干潟の生物多様性の高さが垣間見られるとともに、その重要性を再認識しました。



写真1:ウメノハナガイ
本サイトで優占する二枚貝であり、両エリアで多数の生息を確認した。

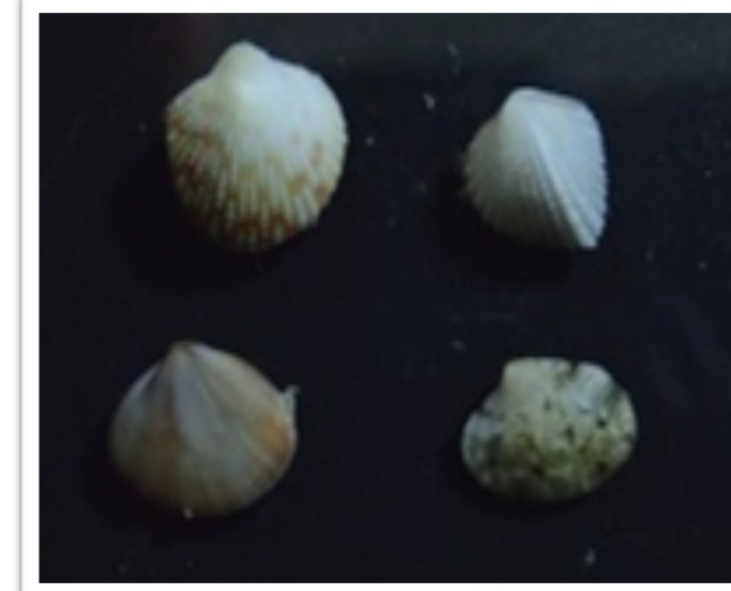


写真3:大きさ1cm未満のさまざまな二枚貝の幼貝
左上:カワラガイ、右上:リュウキュウヒシガイ
左下:タママキ、右下:クシケマスオガイ



写真2:ニワタズミハマシイノミガイ
絶滅危惧Ⅱ類の希少種である。
Aエリア後背地にて生息を確認した。

Bエリア

川平湾の最奥部に位置する干潟で、後背地には外来種であるトクサバモクマオウ(トキワギョリュウ)の林が広がり、小さな川が数本流れ込んでいます。小河川の河口部には小規模なマングローブがみられます。調査エリアの底質は砂質で、潮間帯上部ではほとんど植生はみられず、潮間帯下部にはわずかにウミヒルモが生育します。

今年度も、干潟表面ではリュウキュウコメツキガニとミナミコメツキガニが、砂中からはウメノハナガイ(写真1)とホシムシ類が多く確認されましたが、例年に比べ多毛類の出現頻度が低いように思いました。

定量及び定性調査においては、今年度調査では特に二枚貝の幼貝が複数種(ウメノハナガイ(写真1)やタママキ(写真3)など)確認できた上、スイショウガイの卵塊(写真4)も確認されたことから、川平湾の沿岸環境やこれら資源状況の好転が期待されます。また、後背地での定性調査では、マングローブなどの植生帯でよく観察されるフタバカクガニ(写真5)などが確認されました。



写真4:スイショウガイ(左)とその卵塊(右)
Bエリアの定性調査で確認した。



写真5:フタバカクガニ
Bエリア後背地のマングローブで確認した。